

姫路支部だより

Contents.

- 1 10月の支部活動報告
11月の活動予定
お知らせ
- 2 姫路建築探訪
- 8 近畿あーきてくと高野山 Vol. 23
地域実践活動報告会」 発表記
- 8 環境デザイン研修会レポート
- 9 全国大会参加・研修見学会報告
- 10 石川建築探訪
- 21 第6回環境デザイン研修会レポート

24 Topics 「独自の時間と空気が流れるまち」

～野里旧街道～



10月の活動報告

- 10. 3 (土) 近畿建築祭 (和歌山)
- 10. 22 (木) 第7回建築相談 (姫路市役所)
- 10. 28 (水) 第6回環境デザイン研修会 (姫路建設会館)
- 10. 30 (金)～10. 31(土) 全国大会 (金沢大会)・見学研修会

11月の活動予定 (終了分含む)

- 11. 1 (日) 建築家講演会
- 11.14 (土) 兵庫県立公開講座 (兵庫県立大学)
- 11.19 (木) 第8回建築相談 (姫路市役所)
- 11.25 (水) 第7回環境デザイン研修会 (姫路建設会館)
第3回理事会 (姫路建設会館)
- 11.27 (金) 建築子供プログラム (勝原小学校)

お知らせ

■メーリングリストでご案内の通り、今年も支部忘年会を開催いたします。奮ってご参加ください。

日時：平成27年12月22日(火)
18:30～20:30 忘年会

場所：旬美 魚町店 (しゅんみ うおまちてん)

(兵庫県姫路市魚町76 BMKビル1F・2F)

会費：男性女性共 3,500円

恐れ入りますが、12月11日(金)までに、お名前記入の上、上田の方にFAX又は、メールをお願い致します。

建築士会姫路支部 事務局長 上田達也

FAX：079-222-5533 TEL：079-224-3354

メール：ao-ueda@gol.com



姫路中央保健センター

姫路市の保健・衛生の拠点施設。



開放感のある高いガラス屋根に舞台のようなエントランス。

建物を貫くような円錐のガラス空間。

花崗岩を打ち込んだ PC パネルが特徴です。

同時期に建設された愛媛県総合科学博物館でも共通する素材や手法が見られます。





ダイナミックなエントランスは現在は使われていないようです。

竣工 1994 年
設計 黒川紀章建築都市設計事務所
構造 鉄骨鉄筋コンクリート造
規模 地下 1 階・地上 6 階 / 床面積 13,076㎡

姫路市坂田町 3 番地
開所時間 / 午前 8 時 35 分～午後 5 時 20 分
休所日 / 土曜日、日曜日、祝日



北西より全景

姫路電報電話局として昭和5年に竣工したスクラッチタイル貼の外観が特徴の鉄筋コンクリート造2階建ての建物で、設計は逓信省営繕課 上浪朗（うえなみ あきら）氏による。

戦前の庁舎建築は、各省庁の営繕課により設計を行っており、各省庁の営繕課のカラーを出したデザインになっている。逓信省ではモダニズム建築家である吉田鉄郎氏の東京中央郵便局が有名でブルーノ・タウトにモダニズムの傑作と讃えられた。上浪朗氏はその吉田鉄郎の後を受け継いだモダニズム建築家であるが、この姫路電報電話局は上浪氏が当時30歳のときの作品であり、上浪氏の豊かなデザイン性、ポテンシャルの高さを感じます。

縦に並んだ上下窓を囲む人造石には、立体的な造形が施されており夜のライトアップでは、立体的な輪郭がアクセントになっています。

外観は戦中はコールタールが塗られたそうだが、スクラッチタイルのデザインは当時のままである。内部は結婚式場として大幅にリニューアルされているが、2階ホールの方のような天井や披露宴会場のゴシック建築を思わせる装飾梁は当時のままのデザインを活かしている。階段室のRを用いた連続壁手すりなど有機的なデザインも見られます。



窓廻りのディテール



2階ホール



階段ホール



2階披露宴会場全景

平成14年に姫路市都市景観重要建築物に指定され、平成21年から「姫路モノリス」として結婚式場として美しくリニューアルされ、JCDデザインアワードなど数々の受賞をしています。
この1年前に竣工した旧芦屋郵便局電話事務室も同じようなスクラッチタイルのデザインで現在「芦屋モノリス」という結婚式場としてリニューアルされているが、こちらは、アーチの窓やレリーフタイルが嵌め込まれていたり、また違った趣があります。

建築年 1930年竣工
設計 逓信省営繕課 上浪 朗



夜景



【建築の概要】

この古井家住宅は、昔から無災の千年家と呼ばれている古い民家で、建物の建築年代は資料がないため明らかにしがたいのですが、構造技法の調査結果からは、柱間を測る1間の寸法が凡そ桁行6.6尺・梁間6.9尺で桃山時代以降の通則とされる1間6.5尺より若干広く、また内部の上屋柱が桁行1間ごとに建ち並ぶつくりであり、柱の太さもみな大体同寸法のものを用いて特に太い柱がないことや、柱を繋ぐ貫が比較的太いこと、部材の仕上げには「はまぐり刃ちょうな」が使われていることなど、随所に古式な造りがみられることから室町末期まで遡る建築と推定されます。

古井家住宅は民家としては全国でも一・二を争う遺構で、昭和42年6月に重要文化財として国の指定を受けました。

建物は建立以来いくたびか改修され、部材の取り替えや間取りの変更がなされてきましたが、腐朽や破損が著しくなって根本修理が必要となり、昭和45年1月から国庫補助事業で半解体修理が行われ、翌年2月に竣工しました。

この修理では、当初の架構そのままである10本の上屋柱とそれを繋ぐ柱貫、小屋梁などは古材と技法保存のため解体をさけ、その他はいったん取り除いて補修されました。同時に後世改変のあった箇所は、痕跡や資料にもとづきできうる限り建立当時の姿に復元されました。

その後、平成9年には、茅葺き屋根の葺き替えが再度なされ、平成11年度には旧安富町が購入して、平成12年度に千年家の周辺を整備しました。

【構造の概要】

- (1) 平面の下手半分が広い土間でその一部に「うまや」がある。(この土間で農業の家仕事を行った。)
- (2) 居室部は「縦割りの広間型3間取り」である。(広間が生活の主要部という古い間取りである。)
- (3) 間仕切りに壁の部分が多く、側廻りも軒が深くて開口部が少ない。(古い住居の特徴)
- (4) 柱は栗材、寸法は一定でないが、特に太い柱もなく上屋柱は1間ごとに建ち並び、柱を繋ぐ貫は太く、部材はすべて「はまぐり刃のちょうな」が用いられている。(木造りや構造に初歩的な技法がみられる。)
- (5) 柱間寸法は今の1間に比べて広い。(現在の1間6.5尺は桃山時代に定められたものであるが、それ以前は若干広い寸法であった。この建物は桁行が6.6尺、梁間は6.9尺で1間が割付られている。)
- (6) すのこ竹の床があり、天井にもすのこ竹が用いられている。
(昔は板を作ることは容易ではなく、それに代わるものとして竹が編みつけられた。)
- (7) 壁は大壁造りで、下地には粗朶(そだ)を用いている。
- (8) 屋根は茅葺きで、棟に「みやくし」という木を組んでいる。





【感想】
『なつかしいなあ…』という感想が口からでるであろう。 と思って千年家の前に立った。
実際、来訪者ノートには「茅葺き屋根がなつかしい」とか「おばあちゃんの家にいるよう」等の感想が書かれていた。
昭和42年に住まわれていたままの姿ならば私も同じような感想をもっただろうが、復元整備された目の前の住宅と対峙すると
『…』

言葉が出ない…… 頭の中に浮かんだのは【遺跡】という文字である。
今まで見てきた、古民家とは明らかに次元が違うのである。
まず、軒先の低い茅葺屋根が目に入ってくる。背の高い大人ならば少し頭をかかめて入る位の高さで、
両脇に風呂と便所、そして馬屋の隣にある入口から「にわ」と呼ばれる土間に入った。
開口部も少ないので当然中は暗い。が、この暗さは落ち着く（と思うのは私だけ？笑）！
「にわ」はカマドもあり「ちゃのみ」の囲炉裏を囲んで農作業も行われていたようで一家団欒が目につく様である。
「おもてのみ」と呼ばれる部屋の床板に開口部からの日が照らすと綺麗な模様を見ることが出来る。
この模様は、鉋など無かった時代に ちょうな で削られたものであり、昔の職人の技術の高さを見ることが出来、
綺麗で神々しくもあり感動できる部分である。他の部屋は、すのこ竹の上にむしろを敷いて生活していたようで夏は快適（？）だろうが、
冬を考えると過酷な環境s だったのではないかと想像できる。外に周ると、流して使った排水を貯める甕が埋めてあり、その水は畑などに
使われたのではないかと同じように、玄関横の便所は甕に排泄物が貯められ、肥料になり、土壁に使用される材料は皆、身近で手に入る
ものであり、牛や馬は重要な動力、熱源はカマドと囲炉裏の最小限である（風呂の焚口は外）。
確かに快適性を考えれば、住み辛い住宅であるかも知れないがこの住宅を見ると、現在の「エコ住宅＝省エネ住宅」
という概念を切り替えて本当のエコ住宅の有り方を改めて考える良sい見学と成りました。

追伸：現在日本には【千年家】と呼ばれる古民家が4軒存在するようです。その内3軒が兵庫県に有ります。
これは兵庫県民として誇りに思ってもいい事ではないでしょうか。他の県内の千年家
・箱木家住宅（兵庫県神戸市北区山田町衝原、鎌倉時代から南北朝時代の建築と見られる。）
・内田家住宅（兵庫県神戸市北区山田町小部、他の千年家と比べると新しい江戸時代中期以前の建築。小部千年家。）

【公開日、公開時間】
公開日：土曜、日曜、祝祭日（年末年始は除く）のみまた、団体は平日も公開されますが予約制になっていますので、事前の連絡が必要。
公開時間：午前9時～午後5時※文化財保護のため、荒天時は、公開を休止する場合があります。
【観覧料】無料（千年家公園の有料駐車場1回¥200） 所在地：姫路市安富町皆河233-1



「建築子どもプログラム」は、姫路支部の多くの方の協力で、16年に渡り継続している事業でもあるので、支部を代表して発表するぞ！との思いで、発表しました。

大変緊張しましたが、無事発表することができ私自身にとって非常に良い経験となりました。

(小西 毅)

とても聞きやすく、小西さんなりの考えを含んだ発表内容はすごく新鮮で楽しい時間でした。

順位をつける発表会ではありませんが兵庫県の発表の時間が皆さん一番集中して聞かれていたように思います。

発表後の質疑が小西さんへ集中したのも関心度が一番高かったあらわれだと思います。

(西協青年部会長談)

10月3日(土)に高野山大学にて「あーきてくと Vol.23 地域実践活動報告会」にて、姫路支部で実施している「建築子どもプログラム」について発表して参りました。

建築士会研修見学会（姫路支部）報告

（公社）兵庫県建築士会
姫路支部担当 上中 祥暢

平成 27 年 10 月 30 日 6 時 50 分姫路駅を出発バスにて金沢へ、参加人数 11 名の研修会となりました。移動時間の長いバス内では、姫路周辺で活躍する建築士の方々と交流、後部座席では、サロンスペースを設け、楽しく和気藹々と過ごすと共に、支部会員の藤本様によるパース講習も行いました。前部座席では、グロピウスやワグナー、F・L・ライトなど世界の巨匠の設計した有名建築物を紹介解説する DVD 鑑賞も行いました。



1日目の工程

全国大会参加(石川県立音楽堂)- 金沢21世紀美術館(SANAA)-鈴木大拙館(谷口 吉生)- 本多の森ホール(黒川 紀章)- 石川県立歴史博物館-ひがし茶屋街散策

金沢市内は、貴重な建築物が徒歩で見学出来る範囲に多く存在するので、頑張って長い距離を歩き多くの建築物を見て研修しました。夜には和風庭園を眺めながらの懇親会、ゆったりとした時間を過ごしました。



2日目の工程

うみっこらんど七塚 海と渚の博物館(内井 昭蔵)- 西田幾多郎記念哲学館(安藤 忠雄)- 武家屋敷跡 野村家- 北國新聞赤羽ホール(日本設計)- 金沢市玉川図書館(谷口吉郎・谷口吉生)- 金沢海みらい図書館(シーラカンス K&H)



20 時 15 分子定通り姫路駅に到着、解散となりました。

前回までの研修見学会同様、著名な建築家の建物を姫路周辺で活躍する建築のプロが集まり思い思いの課題を持って見学、意見を交わすという事は、本当に意義のある研修だと思います。参加者様のご協力のお蔭で有意義な時間を過ごす事ができました。ありがとうございました。



金沢の伝統芸能である加賀宝生の鼓をデザインモチーフとし、雨の多い金沢駅へ降り立ったときに来訪者に傘を差し出す「もてなしの心」をコンセプトとする。鼓門は、らせん状にねじれながら建つ柱の構造となっており、駅前広場を覆うドームは約 5,500 本のアルミフレームと 3,019 枚の強化ガラスで構成される。この種のトラス構造としては日本最大級とされる。



北國新聞赤羽ホールから金沢市玉川図書館へ移動中に偶然見つけた建物。

調べてみると、第 36 回石川建築賞、第 37 回金沢都市美文化賞などを受賞した建物でした。

アルミルーバーを編みこんだファサードの銀行・駐車場ビル。

加賀水引がモチーフとのこと。

コンクリートも杉型枠を用いられ、無機質な素材で構成されていますが、どこか日本らしいあたたかさを感じます。

竣工 2013 年 11 月
設計 清水建設株式会社
構造 鉄骨造



どこことなくミースの建築を連想させる平面プラン。

繊細なディテール、材料の質感、ピーンと張りつめた空間。

平面プラン、庭などで禅の「まる・さんかく・しかく」が表現されています。



回廊から思索空間への導線は、日常生活から離れ、瞑想空間へ心をしずめる、茶室への露地を感じさせる。

禅の寺院の庭というと石庭が有名ですが、鈴木大拙館では水と石の壁で構成され、思索空間から水鏡の庭を眺めていると、風が吹くと水面がゆるやかに波立ち、風、光など日頃気付かない自然の小さな変化を感じることができました。

竣工 2011年7月

設計 谷口建築設計研究所

構造・規模 鉄筋コンクリート造一部鉄骨造平屋建 及び土蔵造2階建



金沢海みらい図書館

金沢寺中町

設計は工藤和美と堀場弘の建築ユニットシーラカンスK&H



詳細設計

- 敷地面積：11,763.43m²
- 建物面積：2,111.89m²
- 延床面積：5,438.94m²
- 構造：鉄骨構造
- （一部鉄筋コンクリート構造）
- 蔵書数：約17万冊
- （蔵書能力は約40万冊）
- 駐車場:108台
- 駐輪場:100台

1階：児童図書コーナー



戸田建設を中心とした共同企業体によって施工された。



2階：一般図書コーナー



最大の特徴である天井の高さは、12mの大空間です。特別な開放感にただただビックリするだけです。細い柱・梁の見えない空間・無数に開いた窓・使用されている建材に至るまでも設計者は、狙ったんでしょうね。

2階：一般図書コーナー、生涯学習コーナー、インターネットコーナー



3階から見下ろす





北西より

北國新聞創刊 115 周年を記念して 2008 年 8 月に完成した芸術文化施設である。

北國新聞の創刊者である初代社長の赤羽萬次朗にちなみ命名。

設計はアクアマリンふくしまなどの設計で知られた日本設計の浅石優氏。

外観はカーブを描いたガラスのカーテンウォールでグランドピアノの形を模している。エントランスは外部の緑豊かな空間とつながり四季を感じることができる。



エントランス



外周に面した内壁を黒く塗ることにより、気分が落ち着くようで柔らかい印象を受けた。

南側



南側廊下



ホールは音楽演奏用のシューボックス形式と演劇用のプロセニウム形式に舞台を変更できるようになっている。今回はエントランスしか見られなかったが、機会があればぜひ、ホールで音楽コンサートを聴いてみたい。

建築年 2008 年竣工
設計 日本設計 浅石優
施工 清水建設

階段ホール





2004年開館の21世紀美術館は10周年を超え、今なお驚きと発見に心躍らされる建物として金沢市に賑わいをもたらせており、特に子供たちの瞳からは、美術館という独自の空間の中でおののおのが持つ想像力のさらなる成長を感じさせられました。

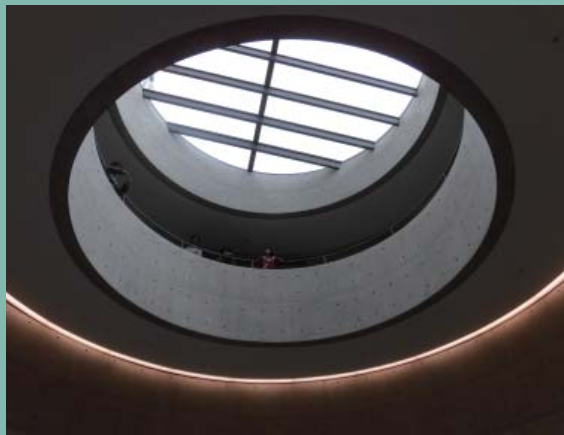
自由な動線と外に開いた空間が一体感を出し、そこにいるもの全てに新たな出会いを予感させるように感じます。



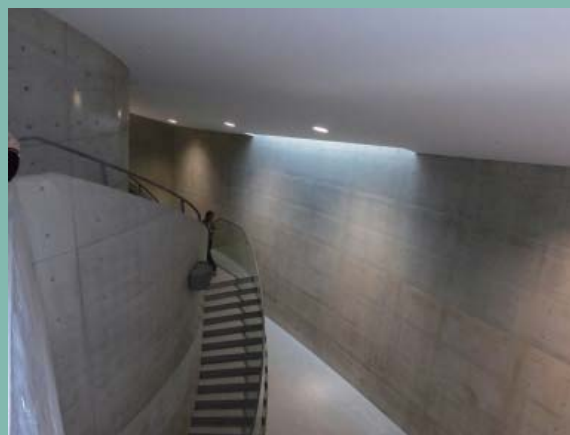


場所 石川県かほく市内日角井 1 番地
設計 安藤忠雄建築設計研究所
開館 2002 年 6 月
規模 床面積：2,952㎡
構造 鉄筋コンクリート造 地下 1 階 地上 5 階建て

哲学者・西田幾多郎の哲学をテーマにした博物館です。建物は、西田の遺品や原稿の展示と哲学の入門を体験できる「ミュージアム」と、哲学入門書から専門書までを収納した図書室や、研修室・展望ラウンジが配置された「セミナーホール」から構成され、建物の一部は地形にそって埋没され、それらの屋上を階段庭園として利用されています。



ホワイエ上部



ホワイエへの階段

哲学とは、自ら迷い、考え、真実を追い求めることであるとの教えを、安藤氏なりに表現された建物です。案内標識も無く、まるで迷路のように入り組んだ屋内は、来館者に「どうぞ迷って下さい、考えて下さい。」との安藤氏の声が聞こえてきそうな空間です。



ホワイエ

瞑想の空間「ホワイエ」には、4脚の透明なイスが用意され、無機質な打放しコンクリート壁と向き合うことで、また、すり鉢上に広がった吹抜けの天窗からの太陽光を受けることで、なんとなく哲学に触れたような気がする空間です。

5階の展望ラウンジからは、金沢市街から日本海までが一望できます。

正面のR壁内にEVが設置されていますが、階数がわからないまま階段を利用するのも思索体験としていいでしょう。



展望ラウンジ



株式会社浦建築研究所
設計年度 1997 年

規 模
木造（一部鉄筋コンクリート造） 地上 2 階建

受 賞 第 22 回石川建築賞
※設計 JV 内井昭蔵建築設計事務所



昭和の初めから 30 年代までの漁業の様子を再現された体験型の博物館。

海の博物館ということからか建物は船を意識し大きな弧を描いていて、全てがとても美しい外観です。

船底に当たる部分に収蔵品が所狭しと並べてあります。

天井から吊るされた照明は、カモメを模して造られていて大海を漂う大きな船の様にも見えます。





文化財登録されている赤レンガ造の旧専売公社の工場を改修した近世資料館に隣接してつくられた図書館。



耐候性鋼板の茶褐色、内部の壁にレンガを使うことで近世資料館に調和している。



ガラス張りの中庭から自然光が差し込む。

中庭を設け玉川公園へと緑をつなげ一体感をつくり、落ちつく空間。



開館された1979年に谷口吉郎が亡くなった為、谷口吉郎・吉生親子の最初で最後の共同作品。

東京では近年、谷口吉郎のモダニズム建築が次々と建替えに伴って解体されている。

この建物もいたるところで老朽化がみられましたが、残して欲しい建築です。



会館建設当時は社会保険庁が設置した厚生年金福祉施設でした。扇状のコンサートホールの周囲にシティホテル、結婚式場、会議室などを設けた会館でした。外壁は瓦をイメージさせるグレーのタイル張りで落ち着いた雰囲気建物です。2008年に売却の為に入札が行われ、北陸電力が落札し2009年に「北陸電力会館 本多の森ホール」として存続されました。

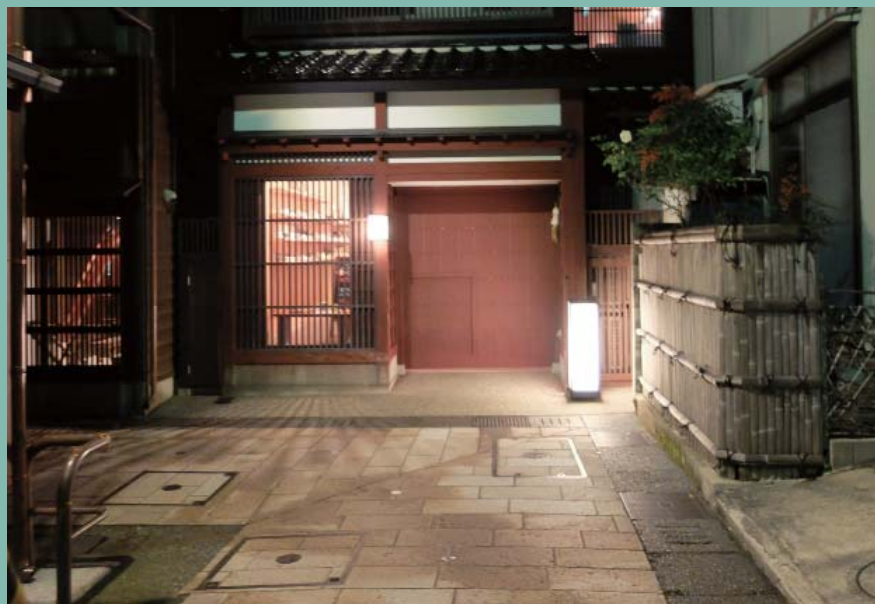
ホールの外には北陸電力のPRコーナーが設けられています。ホール内部は改修は行われておらず建設当初のままのようですが、今回は見学することは出来ませんでした。ホテル・結婚式場の部分は石川県が所有し、「石川県本多の森庁舎」が2011年に開設されました。新たに間仕切りを設置したりと改修は行われていますが、ところどころ当時の面影を残す部分が見られます。



竣工 1977年3月
設計 黒川紀章建築都市設計事務所
構造 鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造



特徴のある茶屋様式の町屋が連なる町並みと同時に木造家屋が並んでいる。
ひがし茶屋町（重要伝統的建造物群保存地区）



日中には、観光客が大勢訪れ賑いのある「ひがし茶屋町」だが、夕暮れになると街灯や家屋からの光が町並みにより一層風情を持たせ、日本家屋の良さをより一層引立てているように思えました。

武家屋敷跡

金沢市長町

加賀藩千二百石 野村家



野村家跡

天正十一年（1583）藩祖前田利家が金沢城に入城して加賀百万石の基礎が築かれたが その時からの直臣である野村家の跡地訪問・見学です。 禄高千石から千二百石へと累進し、この地に十一代にわたった由緒ある屋敷跡は立派な物でした。

野村伝兵衛信貞
着用の鎧・兜

表玄関は土産物店と重な
ってはいたが 大勢の人
が 訪れていた



曲水の庭園



曲水の一部を残しその
後、加賀大聖寺藩の傑商
久保彦兵衛が天保十四年
（1843）建立の、藩
主を招いた豪邸の上段の
間、謁見の間を移築して
現在に至っている。



上段の間

◆概要

- ・テキスト「住宅設計と環境デザイン」の談義(6章)
- ・河野 仁、西塚幸子 著：播磨平野(姫路)の海陸風の統計的解析-海面水温との関係,2006 日本気象学会

◆次回の予定

- ・11/25(水) 20時~22時まで 姫路建設会館

◆参加者からの話

■次にすること

- ・テキスト読みの継続
- ・「播磨平野(姫路)の海陸風の統計的解析-海面水温との関係」の掘り下げ
- ・今後の具体的な活動内容を考える。
- ・左官屋の話聞く。河野 仁先生の話聞く機会を設けたい。

■6章 内装・外装

- ・土の断熱性能について
瓦職人との話で、「土葺きの方が断熱性能は良い」という話が出たが…。

熱伝導率：グラスウール 16K・・・0.045[W/mK]

土壁・・・0.45[W/mK]

⇒土壁の断熱性能はグラスウールの1/10。

グラスウール 16K厚 100mm = 土壁厚 1000mm

空気厚 8mm (一般ペアガラスの空気層相当) = 土壁厚 200mm



※参考 HEAT 20 設計ガイドブック/㈱建築技術 住まいの水先案内人 断熱の基礎知識/
<http://www.ads-network.co.jp/dannetu-keturo/dannetu-02.htm>

⇒数値だけを見れば、土(土壁)の断熱性能は低い。

※実際、土壁の家は住んでいると寒い。(山田)

・土の蓄熱性能について

熱容量：土壁・・・1600[KJ/m³℃]

グラスウール・・・20[KJ/m³℃]

⇒蓄熱性能においては、グラスウールに比べて土壁は80倍と大

きい。

土壁が快適というイメージは、この蓄熱性と吸放湿性によるものと思われる。

⇒土壁のような低断熱な素材でも、工夫次第で快適に過ごせるのでは。

(無垢里 一級建築士事務所 金田 正夫 氏)

⇒ライフスタイルも重要(昼と夜、どちらの生活がメインになるか?)

・過度な断熱性能は必要なく、ある程度で良いのでは?

・断熱材の耐久性 いつまで持つか?→交換型にしたほうが良いのでは。

(グラスウールは一度結露すると使えない。その点では性能はやや劣る吹付断熱もありでは)

断熱材の歴史→さほど長くない。

・遮熱：庇・軒の出や形状は、夏至・冬至ではなく、年間の最高気温、最低気温の時期と時間で決めるべき。

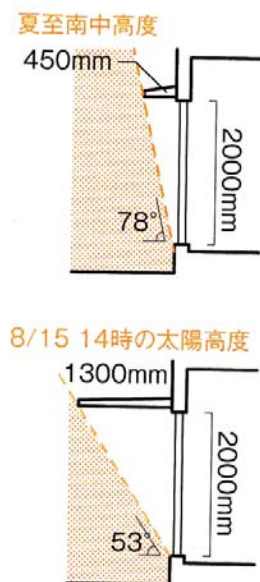
・湿気対策：気密性を高めて湿気を中に入れられないことを考えている(そこまでして防がないといけなのか)

・緩衝領域：ダブルスキン、縁側、軒下

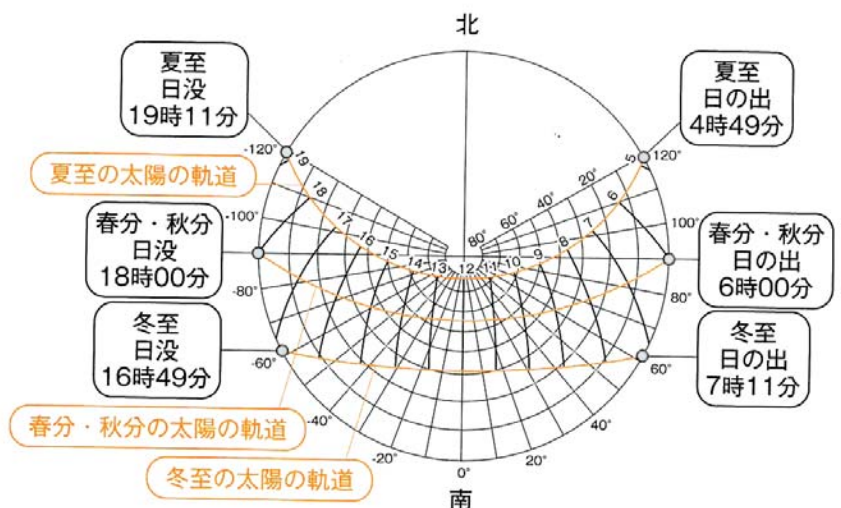
⇒みんなの家(伊藤豊雄 氏)では、最も要望が多かった軒下を設けた(それだけ軒下のような空間が求められているということの裏返し)

■今月の宿題の発表内容

■ 庇による日射遮蔽



■ 太陽位置図



辻原万規彦監修、今村仁美・田中美都著：図説やさしい建築環境、学芸出版社(2009)

※参考 住宅設計と環境デザイン/㈱オーム社 P.100

○播磨の気候について

体感温度と風速・湿度の関係性についてのレジュメ——作成：廣瀬

- ・は風速 0.3m/s で風を感じ、体感温度が3℃下がる。
- ・開口は大きければ良いのではない。気流が起きるような工夫が必要。

播磨の風向と季節・地形との関係性についてのレジュメ——作成：景山

・緩衝領域：ダブルスキン、緑側、軒下

⇒みんなの家（伊藤豊雄 氏）では、最も要望が多かった軒下を設けた（それだけ軒下のような空間が求められているということの裏返し）

の海風はやや弱め）

⇒陸風を取り入れた土壁の家ができないか。

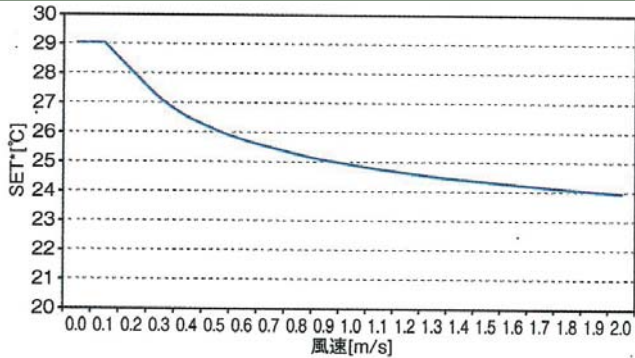


図2 SET *風速による体感温度の計算値

(条件) 気温：30℃、放射温度：30℃、相対湿度：60%、
着衣：半袖・短パン、活動量：安静

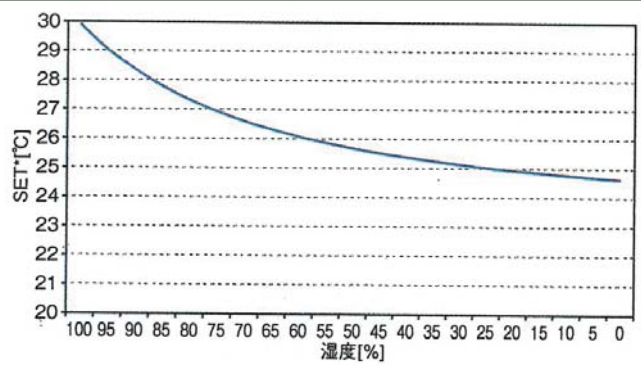


図3 SET *湿度による体感温度の計算値

(条件) 気温：30℃、放射温度：30℃、風速：0.5m/s
着衣：半袖・短パン、活動量：安静

※参考 季刊チルチンびと 81号/株風土社 P.108

- ・播磨の気候：風向は、夜は陸風、昼は海風となる（冬の海風はやや弱め）

⇒陸風を取り入れた土壁の家ができないか。

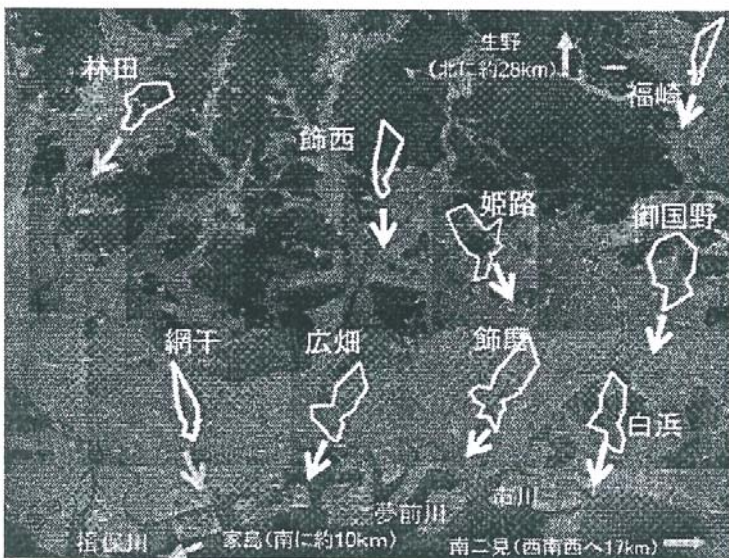
- ・遮熱：庇・軒の出や形状は、夏至・冬至ではなく、

年間の最高気温、最低気温の時期と時間で決めるべき。

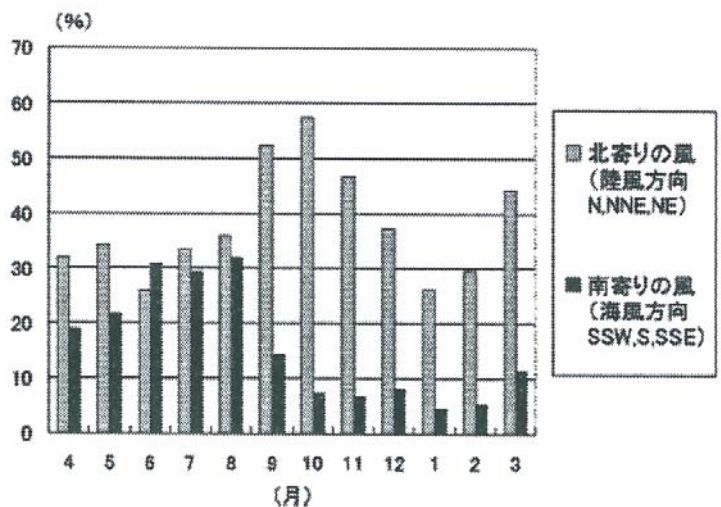
- ・湿気対策：気密性を高めて湿気を中に入れないことだけを考えている（そこまでして防がないといけないのか）

姫路 季節ごとの風向

	夏		冬	
	陸風	海風	陸風	海風
夜	○	-	○	-
昼	-	○	-	少



第1図 姫路市の年間風配図と地形（矢印は主風向，風配図は上が北，16方位，風向頻度は全体が100%，背後の写真は国土交通省の国土画像情報から引用）。



第2図 月別の陸風方向（N, NNE, NE）と海風方向（SSW, S, SSE）の風の割合（広畑測定局）。

播磨平野（姫路）の海陸風の統計的解析-海面水温との関係/兵庫県立大学 河野仁・西塚幸子

独自の時間と空気が流れるまち

～野里旧街道～

姫路城から 500m 北上したところにある、南北約 1km の商店街。

歴史的には近世、豊臣秀吉が姫路城を築城したときの城下町として大変栄え、

その後、池田輝政が築城時には城の南側が城下町となったため城下町から外れたが、但馬道の要所として播磨地域だけでなく但馬からも人が来るほどのにぎわいがあった街道。

戦後には、現在の姫路市立美術館が市役所、日本城郭センターのあるシロトピア記念公園に裁判所や保健所があり、官公機関が城の北側、東側に集中していた。野里旧街道と近接したこともあり中心的な賑わいがあったとき。保健所があったことは子供の時の記憶として、何となく覚えている。

当時の街道には遊技場、銀行、医療機関、飲食店、物販店など何でも揃うほど

様々な店が並んでいた、特に映画館が3つもあったことに驚いた。

街道の一番南に位置する鍵町には料亭“紅屋”があり当時の映画スターや著名人も数多くこの街道に足を運んだらしい。

昔のような賑わいや人があふれる姿を実際に目にしたことはないが何となく

当時の面影を感じさせてくれる魅力がある。

初めてこの街道に足を運んだのは 30 年も前の事で当時小学生であった私が教科書を買いに来たのが最初。明治創業の姫路で一番古い書籍店、木造町家の店中に書籍が沢山並んでいたことを思い出す。当時 1980 年代だったが、町並みは閑散としていて、今とはそんなに変わっていないように感じる。

80 年代になると花北地区の開発などで大型ショッピングセンターができ、車社会という事もあったため、どちらかという野里街道より花北に良く行っていたように思う。

自分自身この町に関わるようになる 10 年前まではあまり関心がなく、実際、地元でもなければ、実家があるわけでもなかった。

しかし、この街道には 25 年前から幾度か足を運んだ。



むかし教科書を買った書籍店の現社長とは高校時代からの親友で、その親友の幼なじみである妻と15年前に出会った。妻の実家もこの街道沿いにある。

全く関心がなかった野里街道とは奇妙な縁がある。

そんな縁もあり、5年ほど前から地元若手商店主と旧街道の活性化について、毎月一回話し合いをしている。イベントの企画や野里街道を周知してもらうための情報発信、店舗誘致等について議論をしている。



街道沿いには江戸期以降の町家、昭和期に正面改装した店舗、店舗部分をなくした専用住宅、ファミリー向けの集合住宅等様々な建物が通りの西側と東側に並んでいる。全国に見受けられる修景された歴史的城下町とは少し景観が違うがこの通り独特の風情と空気がある。

歴史的観光資源としての観点から見ると町家、既存建物の町家風改修は必要であり、歴史的建造物は保存すべきであると思う。

市条例においても、野里地区が姫路城世界文化遺産のバッファゾーンということもあり、歴史的町並み景観形成地区に指定し、基準を定め景観形成と保全につとめている。



しかし、この街道については戦前、戦後様々な時代背景を通じて今日に至る。今も商いをしている建物もあれば、すまいとして使われている建物もある。

職住が一体となる旧来の形態から、職のみ、住のみの形態に変わっていった建物の割合が多い。その中で観光に特化した、まちづくりは難しい。この街道沿いに住宅として居住している場合、観光客等の不特定多数の人の賑わいは望まれるのか、疑問である。それより、安全と静寂を求められる。

この街道を通るたびに感じることもある。

建物がセットバックせずに建ち並び、通りを歩いていると視界内に収まる建物の高さや道幅のボリュームがちょうどいい。車の交通量も多くない。

一部、マンションのような中高層建築物や駐車場をとるため街道沿いにスペースをあけて建っている建物は少し残念に思う。

色彩や意匠的な規制も重要だが、ヒューマンスケールに合わせた町並み形成と保全をより重要視したい。現実的には、諸問題により困難な面もあるが。



しかし、建築に携わるものとして何か出来ることはないだろうか。

既存空き家の活用こそが今後すべき課題のように思う。既存改修と現況調査、新たな再生方法の提案など。

近年、野里街道に魅力を感じ、店舗の出店や移住される人も少しずつ増えてきている。街道にある景観を損なうことなく、うまく街道にとけ込んでいる。

昔のような人があふれるまちが正しいのかは不明であるが、ここでは商店主と住民との共存こそが街道の魅力の根源であると思う。

今後も街道には独自の時間と空気が流れてほしい。



きし・しんや

姫路支部 理事

一級建築士事務所

sign 代表